聞名仏教

第 178 号　　毎月発行
（発行日）2025 年 7 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園口２丁目７－２０
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話（**0798・63・4488**）
（発行人）土井紀明
http://nenbutsuji.info/
アドレス nenbutuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行（ドイノリアキ）
記号 17810　番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

○〈同朋の会〉
毎月２２日 午後２時始
（8 月は休みます）
○〈念仏座談会〉8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
○〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
○〈真宗入門講座〉（副住職担当）
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

恩師に拝跪する人

佐々木蓮麿

古来、名僧知識は数多くおられますが、親鸞聖人のように九十年の生涯を恩師（法然）の前に拝跪（はいき）して通された方は少ないように思います。ところが現存の教育者で同じような道をたどっておられる人があるのです。それは私の郷里の先輩で、岡山県の名教育長とうたわれた高畑朝次郎さんであります。

高畑さんは伊吹山ろくの貧しい農家の長男に生まれたのですが、当時小学校の教員を勤めていた私の父が、その才能を認めて親を説得し、中学校から遂に東京高師（現筑波大学）に入学させたのであります。ところが、高師卒業後、各地の中等学校に教べんをとり、校長を歴任し、最後に岡山県の名教育長として晩年を飾られたのでありましたが、教育長を辞められたときには、県内の識者は口をそろえて高畑さんの退職を惜しまれたということであります。

高畑さんは普通であれば田舎の百姓で一生を終わるべきはずの人であったにもかかわらず、その人格と才能を信じて、高等教育を受けさせた師に対し、終生その恩義を感じ、郷里に帰った場合には、必ず最初に師の寺に参り、師を訪ねて自己の近況を報告するとともに、師の教えを聞くことを何よりの楽しみにしておられたようであります。

かつて岡山の新聞社が、県下の名士に依頼して「わが師を語る」という文を集め、紙上に掲載したことがありました。ところが多くの名士は、大学時代の有名な学者について書かれたそうですが、高畑氏ばかりは小学校時代の名もなき田舎の一訓導について書き、その最後に「わが恩師広瀬了明先生からは八十六才で亡くなるまで、終始一貫、私を鼓舞激励（こぶげきれい）して頂いた。この感恩こそ私にとって一生の精進努力の泉となっていると感激している」と結んで、読者の胸を打ったということであります。

高畑氏はまた若年のころから師の導きにより宗教心が厚く、中学時代から師より戴いた親鸞聖人の画像を護持して念仏のよすがとし、たとい遠隔（えんかく）の地に赴任（ふにん）しても、盆会には必ず帰国して寺と先祖の墓に参り、寺の報恩講にも職務の許すかぎり繰り合わして参詣（さんけい）されたと聞いております。また親鸞聖人の六百五十回忌のときには、薄給のなかから経卓を檀那寺に寄進し、七百回忌には仏前のヨーラクを寄進されたと聞いております。現代の教育者に、こんな精神の持主が幾人あるでしょうか。これ全く恩師に対する感恩と、師の薫陶による信仰とが然らしめたものと思います。

よく世間では「師を持ちたいが、現代には師と仰ぐべき人物がいない」という声を聞くのですが、これは現代教育について反省すべき点ではないかと思います。知識の切り売りでは教育はできないでしょう。師弟という人間関係ー人格と人格とが触れ合うところにこそ教育は生きてくるものと思います。

（了）

《盂蘭盆会法要》
八月十日（日）午後二時始
法話　念佛寺住職
＊　＊　＊　＊
＊法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。

法蔵菩薩の物語

B「おたずねします。『無量寿経』に説かれた法蔵菩薩の願行とその成就の説法の中で、法蔵菩薩が仏になる前の因位の時、第十八願に、

設我得仏　十方衆生・・・
若不生者　不取正覚

（たとえ我仏を得んに、十方の衆生・・・もし生まれずは正覚を取らじ）

と誓われて、一切衆生が浄土に往生しないようなら、法蔵菩薩ご自身が正覚を取らない、いわば仏にならないと誓われて、永き修行をされたのですが、まだ現実に全ての人が往生できていないのにすでに法蔵菩薩は阿弥陀仏になられているのは、矛盾ではないですか」

A「これについては古来からいろいろ論議されてきました。まずこの話は釈尊が、阿弥陀仏がましまして一切衆生への救済のはたらき、大慈大悲のはたらきをしていることを感得し、このはたらきを衆生に説いて衆生に信心を起させ、現にはたらいている阿弥陀仏の摂取不捨の恵みに出あわせたい、救いたいとのお心から説かれた〈ものがたり〉だということ。しかも阿弥陀仏の大悲のお心を非常によく反映された〈ものがたり〉だということです」

B「ということは法蔵菩薩の願行成就の話は歴史上の出来事ではないということですね」

A「ええそうです。阿弥陀仏の不可思議な有難い真実のはたらきを人間に分かる言葉で表現した物語であって、人はそれを聞いて阿弥陀仏の大悲のいかに広大で深く有難いものであるかを知るのです」

B「凡夫である、今の私たちに、現にはたらいている阿弥陀仏の大悲を知らせるためのお話なのですね」

A「ええそうです。阿弥陀仏の不可思議な願力を知らせたいとして説かれたものです。阿弥陀仏の不可思議なはたらきは人間の知性ではとらえがたいはたらきですが、その阿弥陀仏の救いの大悲の活動を、人間の知性に合わせて因果の形式――こういう原因で結果こうなったというような形――で説かれたものです」

B「因果を超えていることがらを因果の形式で表されたものですから、一見矛盾したところがあるように感じるのですね」

A「ええそうですね。親鸞聖人は第十八願のこころをうたわれた『浄土和讃』に阿弥陀仏のはたらきを、

至心信楽欲生と
十方諸有をすすめてぞ
不思議の誓願あらわして
真実報土の因とする

とうたわれています。阿弥陀仏の本願のはたらきは不可思議なはたらきであることをここで〈不思議の誓願〉といわれています。もちろんなにも不思議なのは弥陀の本願のはたらきだけではありません。この世界は人間の知性にとって不思議だらけの世界です。外部の刺激が神経細胞による電気信号のようなものになって脳内の視覚野や聴覚野にまで届くと、それが一返にゆたかな映像やきれいな音楽に変換されることなど、全く不思議であって、なぜそうなるかはいまだに解明されていません。また天体同士が重力で引っ張り合っていることも、あるいは経験されたことがどこに記憶されるのかもまだ分からないことです。人間の知性では、分からない不思議なことは沢山あります。一切衆生の迷いを破って真理に目覚めさせ苦しみを取り除こうという大慈大悲のはたらきが遙か昔から今に至り、また将来にはたらき続けていく、そういう有難いはたらきがあることなどは、何故そういうはたらきがあるのか分かりません、不思議です」

B「人間にとって全く不思議としかいいようのない大慈大悲の活動があることを、因果の形式で説かれたのが法蔵菩薩の物語なのですね」

A「ええそうです。ですから『無量寿経』の説法がなかったら、私たちは阿弥陀仏の不可思議な願力によって救われることなど少しも分からなかったでしょう」

B「もともと衆生に対して阿弥陀仏の本願力がはたらいていて、それを人間の知性にもある程度わかり、そして阿弥陀仏の大慈大悲に衆生が浴することができるようにと仏陀釈尊がご苦労くださって説かれた物語なのですね」

A「ええ、そう伺います」

B「法蔵菩薩は仏となって今現にどのようにはたらいておられるのですか」

A「『無量寿経』によりますと、今現に私たちを救うべく南無阿弥陀仏の名号となって私たちに、〈汝の往生は全て弥陀が引き受ける〉と喚びかけておられると説かれています。このお心を聞かせていただくのです」

B「一切衆生が仏になる前

に法蔵菩薩がすでに阿弥陀仏になっておられると説かれたことの意味をもう少しお話しください」

A「法蔵菩薩が一切衆生を救いたいと誓われた因願（第十八願）を私たちが聞くと、〈ああこの私も阿弥陀仏のお救いの対象になっているのだ〉と受け取られ、そこに阿弥陀仏の大悲を感じます。また一切衆生を救わなければ仏にならないと誓われた法蔵菩薩はすでに阿弥陀仏になっておられると聞いて、〈ああ私のような者も阿弥陀仏のお助けにあずかるのだ〉と受けとられ、因願も因願成就のおいわれも共に、阿弥陀仏の大悲のお心を感じることができます。どこまでも私一人において法蔵の願行成就のお話を聞くのであって、私の救いを離れた客観的な出来事として聞くのではありません」

B「阿弥陀仏の救いを〈親鸞一人がため〉というように聞くのですね」

A「ええそうです。更に申しますと、〈法蔵菩薩はすでに私たちに先立って成仏された〉ということは、阿弥陀仏には一切衆生を救うことのできる功徳があるということを表しています。それを南無阿弥陀仏の言葉で今の私たちにお知らせくださっているのです。〈汝が仏になる因はできあがっているのだよ、今この南無阿弥陀仏でまるまる汝の往生は引き受けるから安心しておくれ〉と喚びかけておられるのです。〈救いの望みの絶えた汝をまるまる助ける〉と仰せくださっているのです。人は〈ああこんな私を引き受けてくださる、有難い〉と〈聞くだけ〉なのです」

B「要するに、法蔵菩薩が一切衆生の往生に先立って願行成就して、もうすでに仏になっておられるという話によって何が知らされるのかということですね」

A「ええ、この話は、今現にはたらいておられる阿弥陀仏は一切衆生を阿弥陀仏の力（本願力）だけで救う功徳があるということを示す釈尊の教説であるといえましょう」

B「なるほどそうなのですね。では今度はその本願力を〈聞くだけ〉ということになりますが、そうなると人に於いては、本願力の救いを聞く、聞き開くということになります。責任があることになるとね。このことはどうなるのですか。もしそればいいのですか。それさえいらないとなるとどうなるのでしょうか」

A「これには深いわけがあります。もし往生は阿弥陀仏が全て引き受けてくださるのだから、私のお助けということさえ聞かなくてよいことになると、法蔵菩薩が仏となった十劫の昔に私たちも浄土に往生したという話になり、釈尊があらためて阿弥陀仏の救いを説く必要はなくなります。又、未だ法蔵菩薩は修行の途中であるなら、一切衆生を救う能力を完成していないことになり、それを聞いてもとになり、それを聞いてもなりま私の往生は不確かにすず救わすから、私たちが必ずれるという信心は起こりようはありません」

B「なるほど、そうなると救いは必要がないかとも救いは甚だ不確かとなるほかはありませんね」

A「大体仏教は、私たちが真理に目覚めていく宗教であり、真実に育てられ、真実に沿って生きるようにという教えです。いわば迷いの世界、自我中心性の迷いの人生から、自我中心性が否定されて真理に目覚めていくための教えです。阿弥陀仏の本願の救いを聞き、阿弥陀仏の大慈悲を〈聞く〉生活をする。本願の法をどこまでも深く聞き、また人々にも伝えるという自信教人信の人生を恵まれる。これが本当に有難く尊い道であり、そういう道を与えんがための法蔵菩薩の願行とその成就の教説なのです」

B「法蔵菩薩の願行成就の話を聞いてそこに阿弥陀仏の広大な大悲心を感じる人は、法蔵菩薩を単に小説のドラマの主人公のように感じるのではないのですね」

A「ええそうですね。阿弥陀仏の大悲のはたらきの内景として法蔵菩薩を実感的に感じるはずです。いわゆる歴史的な人物としてでもなく、また単なる物語の主人公としてではなく、今現には実際的にはたらいている阿弥陀仏の因位の姿として実感的に感じざるを得ないのです。親鸞聖人の言葉にも、

この一如よりかたちをあらわして、方便法身ともうす御すがたをしめして、法蔵比丘となのりたまいて、不可思議の大誓願をおこして、あらわれたまう御かたちをば、世親菩薩は、尽十方無碍光如来となづけたてまつりたまえり。（唯信鈔文意）

とか、

この一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となのりたまいて、無碍のちかいをおこしたまうをたねとして、阿弥陀仏と、なりたまうがゆえに、報身如来ともうすなり。これを尽十方無碍光仏となづけたてまつれるなり。この如来を、南無不可思議光仏とももうすなり。

（「一多文意」）

と述べておられますが、決して法蔵菩薩を単に昔話の主人公のようには感じておられません。むしろ現にまします阿弥陀仏のはたらきの内容として感じておられます。念仏者の木村無相さんは阿弥陀如来と法蔵菩薩の名を一つにして〈如来法蔵様〉といつも親しく呼んでおられました」

B「法蔵菩薩は阿弥陀仏の外にはないのですね」

A「ええそうです。以上のお話に関わることですが、法蔵菩薩が本願を起し修行して阿弥陀仏になられたという経説を、原理的な点から見ますと、法蔵菩薩は仏（法身仏・一如）の限定された姿であって、単なる有限な人や比丘ではありません。根源の仏（法身仏・一如）が因位にくだって、一切衆生を救おうと願を起し修行され、この願をすでに成就されたことを通して、一切衆生を救う力（本願力）がましますことを知らせ、それによって私たちはこのままなりで救われることを知らされるのです」

B「法蔵菩薩の物語を原理的に見ると、願を起して一切衆生が実際にはまだ浄土に往生していないのに法蔵菩薩は阿弥陀仏になられたのは、法蔵菩薩がすでに阿弥陀仏と初めから一つのお方だから、衆生が実際に全て往生しなくてもいつでも阿弥陀仏であることを表すことができるのだと受け取られますね」

A「そういって間違いではないでしょう」

B「釈尊が説かれた法蔵菩薩の物語は一見すると矛盾があるようですが、非常に深いいわれがあるのですね。物語の全体は阿弥陀仏の大慈大悲、大悲の智慧の活動を説かれ、それを聞く私たちに真理に目覚めさせようとの方便なのですね」

A「ええ全体が方便です。方便についてはすでに申しましたが、真実そのものに至らしめるための深い智慧から出たお手だて、私たちを大悲にあわせてくださる手段なのであり、この方便の話を通して私たちは真実にふれることができるのです。方便がなくて真実そのものをストレートに説いても、凡夫の私たちは真実そのものを感知することは非常に難しくなります。例えば『般若心経』のように〈色即是空 空即是色〉などとストレートに説かれても、凡夫にとってちんぷんかんぷんになりかねません。〈方便〉とは近づくということで広大深甚な真実を私たち凡夫に近づけて説く、それが方便であり、そういうことは悟られた釈尊のような方しかできない技です。そこに釈尊の御恩があるのです」

B「そうですか。私は法蔵菩薩の願行とその成就のお話を史実のように思い、そこにつじつまをつけようとばかり考えていました」

A「法蔵菩薩の願行成就の物語は史実として受け取る必要はないし、かといって根拠のないおとぎ話というものでありません。法蔵菩薩の願行の内容を素直に聞いていますと、阿弥陀仏の情（なさけ）が身にしみて、不思議にも信心が私の上に発起するのです。これを単なるおとぎ話や仮説のように半信半疑で受け取ると真実にであうのは難しいのです。真実そのもののはたらきは永劫の昔からはたらいており、それを釈尊が法蔵菩薩の本願として説かれたのですが、その説かれた本願の内容は、実際に〈大慈の大悲のはたらき〉として現在ただ今もはたらいているのです。ですから法蔵菩薩が起された四十八願、そのなかでも親鸞聖人が〈真実五願〉といわれた第十七・十八・十一・十二・十三の願は決して法蔵菩薩が思いつきで建てた願ではなく、はかりないいのちであり光明である真実のはたらきそのものを法蔵菩薩が表した願なのです。ことにこの中、第十八願は一切衆生を救うはたらきを説かれた内容ですから、この十八願文の通りに受け入れる時、不思議にも阿弥陀仏の摂取不捨の利益に預かるのです」

（了）

【住職雑感】

六月二十五日。坊守と京都の真宗仏光寺派の本山仏光寺へ早朝出かけた。仏光寺派の「布教者講習」でのお話のためにである。めったに本山関係から講師依頼を受けることはないのだが、仏光寺派の布教師のどなたかがたまたま『仏に遇うまで』を読んで、一度話を聞きたいということで、昨年秋に突然仏光寺派の本山から電話で依頼があった。坊守も一緒に聴くということで二人で本山に到着すると、研修室にほぼ五十数名の僧侶の方々が黒い衣を付けピリッとして座っておられるので、坊守は怖じ気づいてとうとう入室しなかった。「真宗教学の押さえ処」を話してほしいというので題は「摂取不捨の真理」にし、質疑応答を含めて一時間半、休みなくお話しをさせていただいた。どこまで正確にお伝えできたかおぼつかないが、一応役目は終えさせていただきほっとして、帰りに大師堂と阿弥陀堂を参拝し、昼食は近くのインド料理店でラッシーと定食をいただいて帰寺した。